

<書評と紹介> アリシア・ガーザ著／人権学 習コレクティブ監訳『世界を動かす変革の力 ：ブラック・ライブズ・マター共同代表から のメッセージ』

出口, 真紀子 / DEGUCHI, Makiko

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

762

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

85

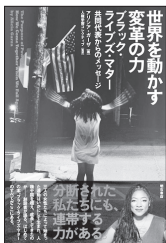
(発行年 / Year)

2022-04

アリシア・ガーザ著／人権学習コレクティブ監訳

『世界を動かす変革の力』

——ブラック・ライブズ・マター共同代表
からのメッセージ』



紹介者：出口 真紀子

本書を訳し終えるまで、私は社会運動について多くを理解していなかった。その一例に、原書のタイトルの『The Purpose of Power: How We Come Together When We Fall Apart』の『The Purpose of Power』のところをずっと“‘The Power of Purpose’”と勘違いしていたことが挙げられる。つまり、ブラック・ライブズ・マターのような社会運動は、達成したい目的にこそパワー（力）があると言いたいのだなと勝手に解釈していた。

実際はその逆で、力（パワー）のない立場の弱い集団にこそパワーをつけることを意味していたと、徐々に気づくのである。著者であるアリシア・ガーザが「組織化の使命と目的は、力（パワー）を築き上げることである。パワーがなければ、自分たちに損害を与えている地域社会を変えることはできない」と書いている通り、本書は、パワーを得るためにはどうすればいいのか、を組織化のプロのガーザが、自伝的な物語を通して、数多くの運動を組織化する中で感じてきたことを鋭い洞察力で語る読み応えのある本となっている。

社会運動のリーダーをイメージするとき、私たちは大抵強いリーダー、大勢の人を引っ張っていってくれるカリスマ性のある中心人物を思い描くのではないか。しかしガーザは、21世

紀型のリーダーとはそうではない、と語る。2020年5月のジョージ・フロイドの白人警官による殺害により、ブラック・ライブズ・マター運動が世界規模の運動として広がったわけだが、ブラック・ライブズ・マター運動の共同代表であるアリシア・ガーザ、パトリス・カラズ、オパール・トメティの3名は、運動の代表としてあまり表に出ない傾向があった。そのせいもあり、ブラック・ライブズ・マター運動は、しばしばリーダーレスな（リーダーのいない）運動として、「自分たちはリーダーレスである」と主張していたウォール街を占拠したオキュパイ・ウォール・ストリート運動と比較されたという。

本書でガーザが語る21世紀型の運動とは、「リーダーフル」な運動である。これは、少数の特出したリーダーは存在しないが、決してリーダーがいないことを指すのではなく、むしろ、たくさんのリーダーがいることを意味している。さまざまな運動体が必要な時に結集し、そのことで巨大な集合体となり、より大きなパワー（力）を発揮できる。これはアメリカにおける公民権運動をはじめとする過去の黒人による抗議行動の時代からさらに進化している。例えば公民権運動やその後に続く黒人解放運動においては、必ず異性愛者・シスジェンダーの黒人男性——例えば、キング牧師やマルコムXなど——がその運動の代表者としてメディアに登場し、その運動の「顔」となっていくのが通例であった。しかしこうした形の運動の脆弱性は、そのリーダーが暗殺されたり、リーダーシップの立場を退くと、途端に運動自体も崩れてしまうことである。

ブラック・ライブズ・マター運動は、ハッシュタグによってSNSで一瞬にして広がった運動だという印象をもたれているが、そうではないとガーザは述べる。実際は、長年にわたり各地のコミュニティのリーダーのもとで、コミュニティ・オーガナイズングの手法に基づいた関係構築を地道に行う活動を継続してきた背

景がある。関係構築とは自分たちの運動に賛同してくれる人を、一対一でじっくりと対話することを通して増やしていく、という手法だ。ガーザを始めとする活動家たちが、自分に任された担当地域の住民の家のドアを一つ一つ叩いては対話をするといった地道な活動を怠らずにやってきたことが、ブラック・ライブズ・マター運動の底力の強さに繋がったといえよう。

時間をかけて仲間を増やし、次にチームを形成し、戦略を練り、効果を得るためにキャンペーンというアクションを起こしていく。ガーザ自身、大学生の頃からこうした「コミュニティ・オーガナイズ」の手法を叩き込まれている。こうした手法のもとで活動すると、たとえリーダーが途中で変わったとしても同じ考えを共有する基盤は強固なままだ。そうやって運動は絶えることなく、継続できる底力を発揮できるのである。

私は今回、遅ればせながらガーザのようなコミュニティ・オーガナイザーがアメリカにはたくさん養成されている、という事実を知り、衝撃を受けた。論理的で効果的であると実証されている理論を用いて、立場の弱い側がパワー（力）を手に入れることが実現可能であり、その方法論がアメリカの社会運動の世界では当たり前のように浸透しているのだ。そして成功体験を繰り返し得ることで、その手法に対する信頼度はますます高まり、実施方法にも磨きがかかる。ガーザ自身、こうした手法と理念がベースにあるため、さまざまな試練に遭っても全くブレる様子がないのである。他の運動から声をかけられて協力することになったときも、達成したいゴールは何か、その中で自分ができる役割は何か、と冷静に論理的に分析し、行動計画を決定したら、あとはその通りに地道に実行するだけなのである。そこには、近道もなければ、奇跡もない。

それは、ちょうどステイシー・エイブラムズというアメリカの黒人女性が2018年のジョージア州の州知事選挙に立候補するか否かを決め

る際に、「今まで長年やってきたコミュニティ・オーガナイズの成果がどうであるか試してみる良い機会では」と考えたことが立候補を決めた要因であったというエピソードを思い起こさせる。つまり、エイブラムズやガーザのような活動家にとっては、選挙出馬のゴールは州知事になることではなく、彼女が当選するか否かはアメリカ社会を測るバロメーターで、より公正な社会にするために行ってきた運動の成果を示す指標として捉えているのである。運動の成果はきちんと出せているのか、何をもってそれを評価するのか、という視点があること自体、私にとっては目から鱗だったと同時に非常に深く納得もした。

本書が意外なところで読まれていたり、口コミで広がっていたり、好意的な書評がメジャーなメディアに掲載されているのは、やはり内容が示唆するものが多いだけでなく、日本における社会運動に対して多くの反省と今後の方向性を示してくれるからではないかと考えている。日本の運動体においては、組織自体に柔軟性やインターセクショナルリティ（交差性）への視点が欠けていたり、裾野が広がらなかったり、同じメンバーだけで小さく固まって活動している現状、「どうせ勝てないだろう」という低い効力感、燃え尽き症候群となって継続がしづらい等、問題も多くあるだろう。本書は、こうした停滞気味な社会運動を客観的に分析する視点を提供し、現状から脱却するヒントを得られるという意味でも、社会を足元から変えたいと思っている多くの方にとってぜひ手にとってもらいたい一冊である。

（アリシア・ガーザ著／人権学習コレクティブ監訳『世界を動かす変革の力——ブラック・ライブズ・マター共同代表からのメッセージ』明石書店、2021年1月、356頁、定価2,420円（税込）

（でぐち・まきこ 上智大学外国語学部教授）